枝葉拾葉集

改正

伊地知文庫
文庫20
361
4

又庫20
361
4

能勢文庫

伊地知氏書冊

牧華拾葉集 全 玄川翁別帖稿書

目錄

京大寮ノ 筑紫紀行　京長法師
〃 花華序　同
〃 京紙紙屋記　同
〃 明月記　同
〃 花乃記うさと　同
〃 擇后集序　京牧法師
〃 澤和傳歌集序　宮海法師

伊地知氏書冊

拾葉集

玄川翁別帙稿書

東大寺奏ノ筑紫記　同録

〃　花葉序　同

〃　京祇園記　同

〃　河内名所記　同

〃　花乃紅うつると　同

〃　撰后集序　京牧法師

〃　澤和歌集序　宮海法師

能勢文庫

改正拾葉集
八冊 安政年稿本
全

第六百卷ノ
和歌巻浮世物語 顔和歌序　西園寺公
〃　毛利元就卿集序　同
第六百八卷ノ
哭賀古京隆婦　藤敏久
〃　同

扶桑拾葉集巻才二十三

紀行　宗長法師

二月十六日いまだくらきに船をいだしてたちかへりつゝ
ふかうれ入江の芦はすでに
生ひそめて稲の葉うるはしく植
まゝ苗代水ゆたかなる白河の関の越えまほ
さういをもとめ侍うえ今は松島箱崎あ
らまし乃こゝろ侍なれば世をすてゝ草

原は風さいはきてさくら花の間も浪の音後
をなぶれば菓は露いとゞ信ずるく物をふかる
に左京地乃好きもはちきふうしてより
の玉乃磯のよきてをのこを紀行るを
思紀行も所〻場多の海も浪打寄て岩
山いとうとおるを隔ゝとなるもあれを文
明十二の水無月のうの間信濃山にて
まうでぬ本をこ一年世のもしきるあり
高塩山菓本は京まれるをそこに書
京打〻はゝ乃あうしなるいゆくこに
まうる月日移りて世月よりたるぬ香撞

れ松生の打ゝ川きゝ云れ梨ゝ書ゝ俗
しかるしをなるまを打てゝ思ふ高
寄る相良を紀ゝ正任ゝ所ゝ
なるゝ書こゝ来ゝ云なるとゝ
る意するゝとゝ高二れ石
ゝゝ行ゝゝ行ゝゝの書
ゝ三條殿ゝ使あるゝ
きゝれゝゝこれゝゝのゝ衣なゝ
うゝとゝゝゝ書深ゝうゝ詠ゝ所に
ゝゝゝゝゝ彼優婆塞の宮にゝと
うゝ見て西海ゝ月に世の書ゝ書ゝ

とゝ和尚宰相殿中納言はをはしたりしを
人〻とゝのめ出しまゐらせ出給ふ事をは
御情の色〻さゝやかにうるはしく
明りかゝやきて　さしも哀
掛もまゐらせ給ひ
宿坊の侍を
あまさへ
にうち出る形
道徳は
くもんかく
法の帝とい

桑窓なん因法華門の信と以里う礼ち
山中と云る所に体たくう礼いるれまち
きさせく可りまう御なる社ち
家本源さ傍より久日かれの和く松虫の
鳴うう和ちあれ流うれとるる
七月六日なれを彼野宮れ時す移す
ちはしるると修しを弘強れる聖し
河ちる山源くち流連あるる和さ川な
られ城の山四ち居のち帰ちるち
ちちさち社ちと以ちるも新相国ち
ち家ち移ち移る人は山里ちくく

古祥院ちく今あ和ちさ万年の昔
のうしいちもちくれさちのうさ
しちち紀神ちハ包うちん以ち和ち
いるち神仏宮后御新を修里移いちん和
るん又秋ちるしとおうまちるも以ち新
和の山れ紅葉ちはいうちや報ははすち
す修里い

吟しるいなち和中乃山れち
四方のすみち中ちて嶮和乃さまちお
ちいち秋ち暁天ちうる人れ情ん五
おちるち月里とちくちいち宿

とかいふ石塔婆のなかにゆる寺の
あるをいふてゆきも深山さいふ本
深く鳥の声もきこえなくなりつるにく
あるのれといふあるかやうあるを
れもとおもふるよい山の末乃国人猟人を
むかへて世のいとなみを海路のまち
しるなるへしやうつるあてをまい
事国本国のあるの意ふくはなりなり
夜浪の風志いつなるを私りまいする
かくさ地をるる人のあるやすゝ物さま
驛館の四地浪ふむるやにいかるの雑事

をもつるあるれうて私出仏事用あ
くなるていうを他あるを蕃を物多
の浪なれをを見るあるなを筆を
物語れ人るれはををいるをれし
い出る

四ゆくみちのうををいあ
八十鴻の年人ををを
あるれ四浪をを人見れい行の事を
さるをれ御風を烟をるもいるある
さとのうを照きかるをるを
川仲中るるをを陽手はむをやや

いつる二のしまを見そなはしつる処に人さ
へまれなるしかのみしまいりの
初今をさきしに御ゆるすまを着岸を
仲哀天皇の皇后を去海と云う所
なるに高社を雅楽文天皇すれ
ますます神を則百面しに神文を
物語を齢をやいかいすまやと人を
何となく神法のあるさもあるまつ此
して社縁を見給ふ社家を幸ひすれ
の節なれとも此やすまぬ夕月
を此新社なる海の上をなれる

ふるさとを澄月をこそ思へ
月ゆかしの夕波をしの秋のうち
明れば彼神を神自ものを多く
おはしまし仏法をさいすまるなを
社塔を楼門回廊ひろいけさを伊恒を
なる社の色を海の人をもの法を
なしく去物を雪を志きうをなやさを蛍
跡の品神を宇一神切皇后仲哀天皇恵神
天皇仁徳天皇以上四座まして神事を
て扉を志を一度あを義分を世を秋を
海なをとの皇祇高社をいまれなる

よし御もたなきを川と號く住吉の明献
律師諸共にていまつる是も社中神さひ
く本殿き松のたゝさにたみかうふしなし
神の回廊にむかくて書いめす發句すべき
し御きは
松風や聲ふと神代の秋の色
此うふてい小祠ニてかすふへき水猿度御神
と西の方一住吉の神次八幡大菩薩ある
良大明神神功皇后諏訪明神以上五柱え
和光れちうらいれもそろのふまに住くねと
まりく住吉の神と文武をまもり給へる

此所も南海かし云ふを流しくまは此所神
のつとる記すくにをまとゆゑ聞くゆゑうくにあ
赤間関もやまもあるまはいるゝ汐のり
うれ先のたゝしをそこま哭しみかゝれ
此迎戸を備くむかしは赤間なるそ
あひた十余町とある此地のやとうとかは
阿弥陀寺としてあつらわる山高く巌そく
立ゝ落るゝ水いさほしと紅いうてみき
そのさまその川のしの塩波よて岩り生
くろ松の根さしと物ふつくくふるまたは
折まぬくゆし御堂を男家積てあて桧皮

所にやあれしらも中衰ふうに法華寺
やしろ仏ぞさかこそやうみ志らも風景を
ぶつりうや門司れ春山をむらいうてて
前の海水をなうも次安徳天皇の御新堂
をん仏をもられうちみほとけ寺いけゆ
ひまをてれすもとうをあ石
れそうの為をもち法人ぞ白魚の白い所
いをやうはきうれ志ぞ志ぞ一うさまりて
きうを世の御うちとなるあなれ世
れうをを忘れ仏をうをかをの所の
為かしんをれうなみをさくうし

ぶうう赤あの人ぞ新所ぞ新中納言幼童
俊敦なを絶壁四郎氏伝蓋宰相義重
中ゐ資盛絶世守義経著く女房う
ら大納言れすを乃房をうをくぞ四人
所ぞ中ぞも義経武勇れ道すをれぞ
生んも寺絶よれれ家

あいさら八幡の次所ぞ法皇を
所ぞれうるよ所ぞの志ぞ法

君れ所ぞをれ所ぞのをう新れ
仏ぞくれ武の仮二位の所君氏法ま
下ゐ指示仏ぞを法ぞくまん人もうる

しき海をこえて伝はこの栄より傳通して昨
四百年乃以後光をいはれ世の淨土より阿
するる證の仏物ふあしらひて山とそて細は
後とも傳へきられ持ちとて門司助右衛
門射宗観阿すして其ましく傳来をみて
まちいひよ法ちれいきて失焼法しく淳へ
る其の数多き中よ尋ねる吹ちる声あり見
や叩経米付月明夜と云ふなしんと吹
栓くてれる礎らくれの前ふよ打ち行ふら様
れ為に氣生とう折しと気乱石れ帰もち、
るよしも證の玉章れありし関守とよ光るを

去る今のあそれなるとゆくる新道場にて會
あるとき發句

霧あふく霧と迎へし浪嵐かな

翌日又門司下総守継秀れ會あまて発句を

戸の行きぬ関よ関ある紅葉かな

珍しき菊かうゆるよ亀山れ八幡へ詣で若れ
石石れ梢をのふとくて見られる数子れ人家あ
はるかなるも大小の容船山陰よ浮へてはやしろ
見やたやらよして常磐木まうらち並まつと
打いく久雲白くおるいく横たえりしうくや姫
れ新きん蓬莱の玉れ枝りいうしいぬへし

又家より三ヶ所に餞別をこゝにいるゝ
こゝて

秋をこゝ亀の人なる家に出

はつかく下総守秀胤ゝ寺
彼人ゝ一葉ゝ寺清出
安徳天皇の宮殿跡をあたゝ松の間を
見る所の宮殿を源氏日月すめゝ
永代中ゝ一物あり

花なる所の三物も昔殿演踏ゝ
稲荷ゝ祇園四条松の間といふゝ
此所を六人麻生殿ゝ兄弟ゝ寺に

むゝ人ゝ山ゝきて柱本ゝ紀陸ゝ
内外殿を見ゝ塩屋乃烟雲ゝ入日ゝ
きゝ稲ゝ殿又ふゝ山ゝ二人ゝ物軍
家ゝ殿人ゝ行ゝ殿の物ゝ所ゝ
みゝて見ゝの者ゝ山ゝ出ゝ所ゝ
いゝかゝさも山ゝ見ゝ
月の光も山ゝ
礼ゝて餞別を

花やかなるを雪ゝ見ゝ秋の月
あゝれゝ海陸の間ゝ
こゝやゝ

松をむすぶ曉ちかく成て後こ
そ神とあがめ奉る廟を再興せ
ばつくく爰をの外同様にかゝれも落て
うつるをなつて後こ神の冥助をあらはす
のみならず高野山寺後西院中將少將
弘法の舘こゝを信仰禪院こゝろをこゝ
又は日彼舘ふしてゆくさのこゝろさしはかり
苔ふる年法アか爲松の法師たゞつ舟弘相
なをして一ぢあるア
ひろく尺をこの民の事業は秋乃色
此國の守代なれる万姓の業花をなのいす

さのこゝろしい祈すゝ拾いこゝ祈
まはあるゝ年は世ゝ世ゝ共損ゝ祈
れをふ事なる祈ふしも祈ゝ為れ祈ゝ代
勸益時ふ法ア為ぬ
十六日松ゝ江ゝ和乃知ゝ長尾とゝ
ゝ志ゝ行ゝ為ゝ安ゝ為ゝ
らしやを為て百額を初む山源ゝ法れ
紅葉ゝ為ゝ祈ゝ為ゝ所ゝ源山ゝる
見ゝ為ゝ宰府ゝ宮ゝ廟一百ゝ陶弘ゝ法ゝ為ゝ祈
二人ゝ為ゝる山ゝ為ゝ為ゝ祈ゝ為ゝ
くゝ為ゝ為ゝ為ゝ驛ゝ為ゝ為ゝ為ゝ水ゝ為ゝ為

紅葉の色深く松の緑ふかき中に若葉を
そへ雪もいまだ消やらぬ岩根に樒落葉を
踏分て進退のうさ心弱く

世の中をあきらめ乃ち弱ふ
ものゝ心はあきらめぬ身をもきし
とかくを思ひ捨て御社ちかく塔婆あり
るを見て拝まん神前を過て宿坊落坊
院々多き中に南社ハ
縁起なしとて世人ハ邪の邪見なりと
云人多し

夏の日長い今こゝに邪魔あるとかゝく
なんいとめて社僧一人をそなへ神前
に侍らおりての居さ入ると比度く
拝殿ハ数ヶ所くさ〳〵ものやゝ古き
反橋ハ中ゝ所に池の如くなる萬樹の松
やゝをなとの見え次西湖のさまに似る
やうなる楼門ハ入ると左右
の回廊いさ〳〵ハ
老松ハ
寛五年乙丑草創なんゝ

と古の御こゝろまくまてなるいやしれて春秋
れ[illegible]声やうくもゝ[illegible]のうちふくもゝ
[illegible]乃寺[illegible]西[illegible]のしてゝ河のとうしいさん
をかうゝ[illegible]やなし[illegible]ゝいくなしい
[illegible]と只敬信の心一すちゝもせる
くもゝ[illegible]跡をゝくゝ秋ゝる
きゝこれあし秋乃ゝの月
浦風まゝ吹ゝまゝ秋れ[illegible]ゝ
[illegible]立ふゝ池乃ゝゝさく
[illegible]やしゝゝ生れゝゝうゝゝ
あゝゝ[illegible]ふ義湯のゝち

紀義宝塔院雲来社ゝる星霜ゝゝ
中ゝ安楽寺いゝゝ廃ゝゝ[illegible]軒や
ゝれゝ西ふ[illegible]ゝ[illegible]
くゝれふ[illegible]ゝ後頼[illegible]義紀
あゝ[illegible]ゝゝあゝれゝ沢人丸乃木像
しゝゝとゝふ沢ゝふ別当社ゝ會所ゝ
とゝゝゝ

善ゝゝ梅ゝゝ[illegible]ゝ白ゝゝ
ゝゝ宿坊ゝゝ會乃ゝ
ゝゝ帯ゝ花乃ゝゝ
五月八ゝゝ[illegible]ゝ一度ゝ板仏相會序

ま本今くいとて奥をさゝめぬれと飽き
ちまいつとぬ此寺は天智天皇の御願なり
白鳳年中の草創なりとぞ沙弥満誓の詠し
こゝろさしくあしかゝ山寺はしまとを
るとは此寺を詠めりとぞ万葉集に作るや
諸堂塔婆回廊ともに何かしこもみえて
むかしは朽かたちとなりし観音の御堂
ばかりを廃寺にのこしてさてしき佛
の板須堂及戒壇院かなくなりたる
疎縁しては何のはに立穹南寺南都
東大寺の末寺なる宮流此寺の何もしれず

古き都の人なれはにや花立元焼しこめえ
んなるさまさゝはるかにいとく何ともなく
ゆしき開てゝ見てすなりて絹をなしをる
鏡の音も聞えて西の方に見ゆなるは忠
ひ川深川なとを見川宿坊より西の方日
弘相乃やとりし花基坊といひまて又一夜
あり

深川は時雨し山のしはしの跡

今なれはまたいつしかあかれとこそやうて
立別れ行なり無都のつらく行き法師は
まつしの為にかしらをもちんとてありと

となふるものとしるしをくなり紀ノ川の
傍なる神のうへ[illegible]
天智天皇の皇后
むかしの秋乃野[illegible]大なる石すゑまゐ
敕をもつて故府構の月いま一つを[illegible]
時乃親書者の[illegible]
宮を造[illegible]
[illegible]刈萱の開[illegible]
我が[illegible]
敕なる[illegible]
いうもの[illegible]

紙[illegible]大なる[illegible]
れる山の[illegible]
乃はるさを[illegible]
里[illegible]
る只民のはいえを[illegible]
世の[illegible]
[illegible]
[illegible]
なる我すゑ[illegible]
を[illegible]
[illegible]

さてもかの神をたのみまゐらんとて
はるゝ〳〵こゝまで松の陰をすぎて
深川の末を過る老僕の立ゐ所を問
もやとあるまゝに道の乃法師の名をた
ゞあるまゝにかの引ものもかれもあ
きていとゝはるゝを待るにれを新
いにくさんともなく弱うちもやゝ陽
のかのゝなるを地多といふ名所富
士を熊宮ちといつる浦古門の寺なるとは
はるさうる山鹿を波ちくのをとゝ
すはまちとゝ奥ゐ紀ゐ方又

絵はかはるとうちはるあるへきやうにて
庭はの美本見ゆはるを萩はるを紫うれくなる
うちゐ景行の紫風あゝ〳〵く吟く猶
めるをいちをきめ孫桂ゐうは院を道とす
きるへくて〳〵をはくさんとゐをとゝ
ゐをきはゆめれを山百はさゐ紙見行を
前を入うをゐるふく志賀の鴻を見帰ゐ
て神ゐを大社ゐをくうれゐを人をや宗
久人とゐ右を名海はは要原をくはらる
ゐ仲国侍坊杉ゐを人氏のゐ下門を
なゝへ行をはるうくをさうい四をうい

ろし家より舟出して志賀のしまに押渡
るにふく方の風さへ添て行舟の帆もおかしけ
浜ちかく成しまする程に明神まうでの
坊よりとて禅衣の人むかへに来て案内
ここさ為案内となりて住吉社山際
おうミにはしみむまうしかしぬ案しはしけ
ふりくみすふきつねとしころ也これやめ
るを塩くむ海士のやとなりけむと云るか
社も古代のけしきて神の為をきしける御殿なと
大何して おもはるも 知方も見るに知れなし
くれ塩の内 鹿のくるまも知しき みなきら

社ぞ老たる社人宮殿に入縁起のい出して
しきりて読きかせあるしかつて見ら
侍社中社外の盃酒すゝみ宴して心る
なるふ古とく縁起を万葉よりあめの
鳴きらく見て筑紫の松みしかし香椎
の浦まて近しとやしるまの海の面なにとなく
見こまかれのよくて木の葉もも志きくうく
阿木いつうらし海の石をくりきて浪の
上寄られ海よいと遠きも忘れぬまとも
浪風をおさへうきうらのなうえもて
うらわたる舟やみもさくらん

ゑとす仏の僧侶永の四月老もまされ
ましい近ういたして七葉も共に偽りあり
世界をおほめ申して又此所を結
自住吉の御師行ますいまだ見れもかなきれ
やうなと遠ゐて はるなれら雲のあを神
さいあも橋門るやうあれく社壇もすき
うにいうまとくに十年余れ世の中ん
見られぬを以ちと神前の形ち此
五のかまるあれ社中をのく見られい大
所れ言いうれて ゆへあると見れらはまと
て此れ社を御師行ますまと遠ゐさ

さ中此家ら打まと御社はやうまれらさま
めへとて勧進れ僧の定書二三四月あ
をうはれ社をまくすくなあて
れまは仕位るとまもまらさまを
年永享十一年れ歳といまを令年四十二ケ
多く共時れをまんといれ勅をの僧九
五幸とまきわくくくはもはまくく
月れ正五まら祈ていくまれら
くゑ

祈うれれ雲ふまれむさとの祈し
すゑれ五ゆうゑやなとまく

うく事かたいなれども中書弘論乃事へ
文はうそ沢をそれ元ものとも
天の御やしろ神ものとも乃月を
なりうをなるらていはやとさい
忘事なれ事をゆるくなむ
かはのもと松の弘相宿形のふ白の事十
書書秋の四紙
夕なみくもれやまこ海
ふ白ものこ日ものく明をせ七日あいるふ
ものく乃乃元しいうとゆ迷をせの松
れあ日し今日もみるあやまれ位を一打
乃あやまく位迷ものく乃は
秋事をれれものこの奥はを
ゆくれを九日生れ松原一とうふ日れさ
ものこ五色位ものくたなり川をれまこし
れを右く一村のやし あを則重廣ま
御社く法施ものもれを姫れ演て
塩屋松く位れさまもさしまれるをを
く行れ松乃ものさ山乃を浦山をゆを位
ものを紀を山をものくを位のこ松を
引位あくくのくなみいそくくるを
浦山くをゆをまんまをくそっ

なりてはうのみちつゝすゝみてゆくてうの
松原にいたる大さ一丈あまりなる浦風
ふかくきこゆるも哀れなり入りて社あり所の神
は熊野なり松原すゝる人社の多く
あるは古木ありしも生ひしげる木のまつ下に
葛原なり西は時雨ふるも露しやもしく
ときさる雲の末葉おちかゝりて色かはる中
にあふぎ開くにいづれのまいさうらんやうに
てあるしらぬ折しもなん過ぎし所代うらい
きまつてさして帰りけん事などやう折て
それ根を人々すゝむことはりしなどいふかりも

うしろにさうりもりしなるに社壇の右のかた
に大なる塞ありしが姿はなるそれ神
さしるあらし古れる末なく生ひ塞とも
いふへうるさきとかんする秋よそひの紅葉
きのむかしのそなたにも心あらくてみちる
所にこそと

あすもつゝね塞のすさみのうきみさや
世をはなく木の塞とぞかな

かゝるかたなにやあらしき龍家寺の院主
か老しらざるに語らひし事を見るそのゆき
まなる老なる人にしる馬ひ禄に皆の松とりぬ

さして老の袖にけれるしもやうてけ
ふはこゝろ礼を打出るまゝ行乃れの
こゝもとある者りこゝ行なるまれて
まゝとも乃ゝ有て有すめあるゝと情
こゝもくいこゝくとなれ道るゝ書う
れ行まま又情多ゝ神のあすく弟孫多と
いるゝ日行れ四宗雅とゝるすゝ行
やゝもしてゝるゝ中ゝるゝうゝいゝあゝ
ゝ乃しゝるゝゝ忘ゝ海りて秋ゝ行
乃保ゝいゝしゝき神のゝはゝゝにゝゝ方老
ゝゝゝ

おゝ乃やれなれゝ乃ゝ乃を毛て
行ゝとなき秋乃まゝれを
返

乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
新ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
み乃日秋ゝ月乃朝日いはゝう時ゝゝゝ
ゝ打ゝゝれ道乃ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝみれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
松原をみゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
葉及ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ばゝ又色そへて猶たのもしきことを祈るへし
こそありしをさる事にまれ此かの本を
見昔の事を折にふれてはいふかはゆく末まで
くれぐし来れ事ともおもひてあらんつた又
其二葉のころよりかなの事き此時の若葉の
とし幾万代も絶さしむとてまくらくる
るまとつゝ神明のうまをなりれまちり
つぶまちいのしまふ定しむとてさるや
松をいつれも神の志るしを
家かしこの陰よつもへ蔭うつりやすしの松の
しをあまれあやしきまでに松の事もまさる

うはのつくもかなはぬ御神の月いもをたゝうき
しきる松からも見なんをふゑてはまい松なりくし
先雲にも立寄事つきまさをとるをもふきち祈念
なをすへし
いはひ乃はまはまちのつゝ松の霜を
陰のはよるまの若緑の月川
見るをまゝ里家安全の祈りし事なるへし
くて神の前に参りて御殿の大なる事は世
まち奥て志つと遊宮まうして玉をとらうまてはず
社まてくしまるにれるまと給事御殿の所くりよ
見法よいへいかにて大木なたまたうりして

北ちかくあるこの御社は正面を
いぬのかたにむけ乃ぬ中乃
ゆうかほのさま茅の軒端をし
を迎乃ぶく所ゝ所ゝ乃ハ
ゆゑいにしへを尋ぬ乃
住吉の里乃海辺なとゝ
迎ふ風景をいうまもなくて
既に神さびわたりたる社
ゝ又住吉なる
此浦に
神宮寺なる
社を

のくさともまれむ墨の袖なともつゝまし
にこゝろ留ることおもひやられなる
一 翌日会あり
松の葉にたれならし世をすつる時なる
松江桐もたゝしく此会に作りていまたいはし
ある日竹の事なと弘桐とまうのこ語り申けれ
まことさとりつきしぬきゝ持来をきれけれくる
む安にいまをもるの男たゝく酒ものをえて
してしひとたかくて清からも事すれ、するの
事多かる安文ゆきを夜いつもあら
て寝覚もいとしゝきの明ぬれをたれ

ゆかしくも出る情をおもし 桂かはことなるを
はし香推家にていとまぬ家をいはくれもな
きつくねさひしく袂のかへりし木深く草の
うらみのまうきをきる橘のさ乃と語りて
もるしき芸のに及とおすとる御所を造
えたまひもなりもなるかり級のさりもそとめ
うちうしつきのこともすさりしきそめの
そしうたれもあるれなる紙をいとむし覚え
て緋の御桜にと松乃とさくて住えの郭
まるさかりしうて御袖に付うをきむと
さていは此枝をとお折く

りて高れ分を二家とわかりくねと
香椎れ杉やちかこ
所神を重毎又八幡て祭りて
所神を名後とて神田宮居とて
とを重毎と号て奉ち神あるも名後と
杉家を杉くこれる人れ
なる四人随機れ先又こ乃こ
と出を刈香椎海なる磯菜摘
子もと叶くこ
ちの浦きこ
とを又海きこ
おと里れ信こ
信きこて
つこ花と
和ちと大ち
こう山
ちれ又見れこ乃信こ
う社へる云こ
こすこ生こ
ちなり世こ苦楽こ無れ理こ
くり乃ちれ縁こ
ば見れこ

叢萓の浦といふあたりしら川を見をこせ
たまひて

　さふらひのみゆきなきの浦を見
　所みうしとてやうらしなるらむ

そのゆくこゝは昔の住寺にて宗像にまうでし
ぬ所はまたこれより先にて長寿寺とある禅院に
ておもしろくあれたる社寺に源山乃ふもと
たゝ池はまたゆきありて来迎寺中
ま御社にて回廊といふもありてなくや
雪もさそかゝりて御殿は廢たる所
有左は川なれは汲とく滑川にて又

椅はこの所かゝる古跡とて見て出ゝ御
所は田代姫と申源頼朝卿姫と一所
墓所しおはします見所は御所なりし跡
すさまじそのみなとは此御所もたへはてゝおりおり
また又其筆を納奉て

　人の代のすみけむ月をむかし見
　所はいかなるらむ此あたり

すれは八幡宮のおはしますをおかみて人の代をまもる
いつくなるらむしはしとて此ほとりを鶴岡道すから元
社ともありつゝ鎌倉ゆかりしく御所の建立さ
こすさのそれよりかゝる所さてありし照

神社のことゝ申すもけみとれ出ぬなり神
乃乃極意と作へき事や神を直乃
さらぬとゝるあるべしてとゝ知きゝして
つゝしまこと申やうゝ信ゝいつ
うれを綱のゝ乃大海をいふも我を
ますれはとうまあるもしをなを
高賀神偽のなり海ゝをれもし
作ゝ彼小武のむすびとれあるい
はくゝいに雑をきゝを大海をんるゝい
ゝをいつをゝるとうをもん今日をゝ
風さうゝく神の宗もいゝを志をゝ

為れ乃とゝ申ゝつ日みなゝ明ひをいうなゝる
事をゝふゝをゝ義なれを
をゝ乃為聖うちゝ乃ゝ大海まい
隠れゝるゝ誰をゝみん
旅れうをゝいはゝなく世れをゝをゝるものの
うゝるゝ世れゝるをゝるゝ松ゝるく
さめ作ゝをゝいゝゝゝ共をゝ神をゝへゝ
なみ風れう初をゝをのをゝなをゝを変をゝも
神ゝゝをゝゝをゝもあちをゝ松原
をゝはゝなゝて名海をゝいうゝゝゝ
うんゝをゝうゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

祝をたのまくさうしてやまとさとれ
その石もそれ人みをたのまてこの所すい
うしなうへし地をはさしあてうすて石碑
をいしゆう年九そこ及へとあるを敬位
はさうあるをはたはれ祝いはるを我身はた
りいをのへはあるいあへ乃なれ世はを祝
をれいみをかうはゆるすれうれ
うりまくさうなるへし後成ては筆跡
をはしまうをやとあれうものをはは市を
まうをはへはうへいをかうへいをものい
はれう市ををいうをはをたいをを身

ていやきをとはへきこあしにやはんかく
てかをとかあやうをかぬをかをうう
してはれをくなるを要をく村をて寺祝
をこをはうを民はは表あはは紙屋をる
ら民川乃もはいをははなをて祝乃祝
うをはかうへ時をいをくうをれ久月
表をはをやうはしのはをるをはを
あをとうやうなるはは塩やををいへ
うをうをうをををうをををはれ
をを村うを

塩やうぬ芋　乃屋は秋をあをれるう

月やきふるをいとゝさび
神垣月を秋といふ事源氏の物語にも
あるこゝ作るや家なる庵を岩根大海の
きしてあしたさしてこゝろ
丁餐白をと物もとも
をいうそれ月ゝなる秋乃船出るゝ
又あるゝ人有やきゝ
いとゝさん芋屋此月乃夕くれ
みれ日江渡れさるゝ
のゝ月江をとゝくゝ
のゝてとゝくきるゝ

こゝうと神を言ゝて芋れ長ゝ
うゝも月乃ゝ
ゝ月乃焼ゝ
うゝをゝ
ゝいゝ月を入ゝ
しゝれ山の書見ゝ
ゝ秋を一日を
人れ迫門をゝ
きん有ゝ
いゝ志ゝ
ゝきゝ二ゝ

さて就泉院明厳律師は坊主頭なれども
さすがに旅はさまざまの経験をつんでいる
ものゝことにてあるゆえ云ふまでもなく
遊び慣れたる彼神を又良性といふ郎にて
ありなれども見るに色あくまでいとあり
くの世なれども俗にして相変わらず入道
の衆大原と云ふ山里なれば風
流すてきもおかしさもさることや
ちくとまみる
色黒とゆけめて四位やまるさまの紅
をうつす所物ゝんやを君を紅ゆるゆ黄地
の紅にて頃磨なれを見所多ゆる義方
ゆいさる本地墨乃色もえもむし体と先く一
度あるおかしかるを絵うを紅きて元紅
く絵ゆ紅ゆるを書ゆる懐帯ゆるいつも
をさるあるゆ黄白地はゆなを紅ゆ
なく絵ゆゆ

本相を墨ゆゆゆゆ山路うる

一通ゆゆゆゆ竹林寺ゆゆゆすゆゆ人
為ゆ契ゆ俗ゆを人をゆゆゆゆ
去人なゆゆゆ会ゆ眞一入なゆゆ

日と春うちものうとなりて春う
へ雪のこりうしのたちてうちを
ゆかんとうとかとかいつとうとゆを
そはとなくいつとうとゆを
あしさゆるとくとくとうちうち
うあぬちうさうんを四日日を今日
さくこと十ちゆゆんけゆたこちち
うたちさういさちゆる山川乃石ることち
なゆを行ちとうとゆをうおうこうとん
のちうちのとうなをとうや巫峽ちい水を
しうちうさうちなく大切乃石すうち

れてうまのくしてちりけちうちをの事語
まなん作ちとゆを神を月十二日山口のや
うちを帰りさく山語の日記を書ること
作ち事ちうたうち

老葉序

同

祇園主古人もかくこそ紀行のはじめなる連歌
老葉といふあるこの河内の国の郡山の宿なる
これいつくと孤竹あるいくとそ
ちをしとせんさいなる料帯とをもひ
てこさるもぬ人もの紙やもしとそ
はなをいひあるををこをこ行るを強
しあるををてまるつさ事しなる
されをうちを紀行こ夏をのの
ゆるかをのの国行尾張の国をを

八十はれる年ぱかりなるこいふものみそ
うりくて里のうちまいりやすまるぬる近寺
自所をうりむ人雖耐やこの鈴をさ
ぷ下ゐくてゑ硯をむりて白こゝろいつん
庵いとしたるたまもあしのおかゆゑ
うをとをゐくうこしうゑくりふるゑんを
のうたたもあくれ古人のいかるゐ
しを

宗祇終焉記　同

宗祇老人年比の望廣をものうゑりや郡
れかあくまりをゝ年れ長月始春自
所や今年弘とを乃長ゝ
其秋れゝ紙路乃京ゝ帰る
山れゐをゝゐ紙路れ紙ゐれ
ゐゝをゝを求ゝ二せ件をゝれぬや
ゝて又悪ゐれゝ
れゐを一ゐを十月の末駿河
乃根を切ゝ乃く伊豆れ西神ゝ小濱ゝ

まち波こゆるさけ破をいけ玉強倉を一
見さしよ右大臣あるそれうこと九代まち
業へも只同れ前乃四ゆ〻く霧の景れ法
乃松雪れ下乃いく〻のもきよ石清水よも
きもさきる〻むさ見ゆる山乃みき
すきるやい〻れるく〻いく〻年のうち
唐乃〻ゆ〻一宮よ八九をこれうと山れ日義
の面い鈴指のきゆ出来る九八ケ嶽二ろ
ろろれく〻乃れ人も輪うゆといせ
しかく〻方彼方ちゆゆるくもむさ聖を
もきを色よ物ゆく〻も月朝日ろよ

越後れ府ゆ見るゆ京祇園さんよ入く〻年
月陽乃ゆ年なしかかくゆ数へれゆ
しゆゆ物しを鄙れ長路れ稽乃ゆ所よ姫
ふ年ゆ乃く〻日数よ物ゆ御神五月廿日
あ乃乃よ高乃ゆ乃れゆゆ乃ゆ乃ゆ行
よ雪をきき〻く〻なゆ乃も須乃ゆも見来
なく有乳乃山も〻いく〻かむをいふ人を
うれやうの旅宿とゆゆこのゆ事
みてゆゆく〻大宮澤く〻日ゆ稽ゆ
ぬれ水れ人よ〻ゆゆ宮よゆ乃ゆく〻ゆ
あ〻ゆよゆて塩ゆく〻てゆゆ人まゆも

こと

元禄十年月なき人ともの
ひとりとうかれ雲はやとりを
かなて猪月は十日巳刻ばかりに地震大
ふりて諸国地とりやとりやと笑る
事日よ幾度となく日数を経て五日六
日打続き人民おそれうろたえ
あるいは八幡宮をうごかすぬう
又おなじくやとりを求めもを笑ぬ
元日よりて家祇園祭礼無之分数日連奇

年やまさかをいう紀き一表雲
山一面に消ぬ
山まを八十年よりへし十年ばかり
ふるうと侍ふ老ものうへを
不思議九日猪宮ふ一形侍ふうまつり
し数日
まを柳も年に正月に笑う邪　祇
山雲ものうへ雲ものうへ如雲さえうつるく風さへ
くるくると日数つる如月ものいふ点ものと
数ものを語ものを打面ものを語ものを
ものをいつものを家祇老人まを山まをして

伯母をとらせ給ふとて食事のやうすゆかしく
なりまゐらせ候人々も嫌ごとさのこそ
いとゆかしくなん候ようつとの御ん事を如
うし奥様はいかゞ知人をもく御ゝ齢まゐの
を隠し所をとなたしくゝ申ものくゝ文
を書ことなしい御もう冨士をも今一度
見物もしたくゝ申かと相模ゝ神ん
もしたくゝ思ふまくゝいなしいうくゝ信濃路
よかりもちくゝ川の石ゝみまゐ蛍は
あゝ舟を渡ゝ古さいりといゝ事よ津ゝい
ゝ事よ思の日きあゝ伊豆保しいゝ石

西ゝ湯を中風ゝ煮ゝなゝ者ゝ家
祇ゝ二ゝなゝ湯ゝ
て炊ゝ湯ゝ申もなくて月ゝ結ゝ
をゝなゝまいゝ
いゝをゝゝ者ゝ
ゝゝむ老ゝ祇ゝ
文月ゝ八武ゝ入ゝ川ゝ
上ゝ西ゝ山ゝ門の陣ゝ家ゝ
ゝ仏ゝ祇ゝゝ事ゝ教ゝ人
おほくゝ白ゝ連ゝ三吉野の里
川越ゝ移ゝゝ十日ゝ日ゝ

さといふ彼らして浜にいでちのやうにまかし
と京どのゝく連哥よし侍る氣力も出く
るやうにて鎌倉なさに西て十四日より
千句の連哥ありしに十日に果ぬ一座に十句
十一句なと句數も此比よりもまさりし
詠さ句とも哥の侍し此千句の中に
　名ふ此ことまい世にこれをまかれ
こいふ句に
八十まていつか頼みし暮ならん
年のわたりはゆく人もなし
老の波幾かへりせは果なし哉

おもへは今はのとめの句なりやと今おもひも
このあらましを伝ふ共七日八日此安日宿に休息し
て廿九日に駿河の国へとおもひ立侍るに今日の
午剋斗に道のほとまてすゝみし云遣をも
何ひくいひたる事をやるすこしも葉をもち
る殊にて家志なりしとなきれ玉いのちきんこ
うつほといふ所に旅宿を求て一夜とゝまりし
侍るしよ駿河よりの迎えの馬人なとあまた
もなく見知りよ絶るを能て来てもまたれしかは
箱根山の麓湯本にて云ふに見しよ座の祐
まうとかいへまつれより湯浴まりて喰物語す

しまうまれぬとのいはれとなりて
ものいはせんとこすれども身をかくせども
無中ゆるがれいたくなりてきたれを押うこ
うゆるとなれを只とせれ寄る定まりて
まりといはく此れ絶るをきて祈
云奇と冷せるかをを開人是を武子門弟を
此御奇よりて寄るこのきたのかの
中ふかく前白ものや

眺る月よ立ちうるれ
と云句を流せしく我を付うて寄付
ゆきたなりたるもしいれ灯れ消る

やうなりて息も絶ぬ子時八十二歳之長二
天夷則晦日まれ人ものすもなくいつ
ゆくことをいつるやるつしうまれ枕の雲れ
為おもをまく猫を出れめる成なしるる
うれ移ものやんも猫まして一生をく
しまつるこうや芭とを祖神ゆん為法

猫れ世まるこ猫ものてまるこ
夏のうちもまと尺ものれ
和尚れ御祈のゆくこまいをいを猫へうを
世ゆ是柳山を出てふ越要ゆるもこう
まうれ入くゆうれ人れやうまらく法さる

川をこえて後河内の国に桃園といふ山村に
舎下りて定宿とせはしき入相の程なれ
ばいとゞ寂しきに一日ちかくなりて明く八月
二日はるゝ曙の門前のすゞしき入江の水
流て清し松柳桜梅の庭に寂しく松
なみたちよりかゝる雲をおもひ出て一本
を枕に明暮をきゝて十日の程
能原にて松のおもひ原の程
雖もう秋も初ぬ
しもなれるまゝにいとゝ物さびしう
十一日より長雨降て
秋の月をみず

法華寺あたりに清見の磯なるべしと
ながめ月もなかばすぎぬ
かゝて府内をもとめ我等宿りして家頃水
本にたゝれ見まてをきて
事ゆゑ十日程ありしに
一度を為く家祇園もまもりの
の法後河内やもこゝ
らに住まつりて
去年秋のと青紙後ふくるまに
数日二川を一川
さらこゝをしもとて

御ゆるしを請出されしを発句として
くもりなき御よのはしめか秋の月 宗祇
えたふ小萩のうすもみちさへ 氏親
小萩原物おもはせて風すゝしく 宗長
同し夜御一続の中に暮月を四人と云
並よりて氏親
暮ま見む月のたましひを誘し風の声
あまり人となる秋をしらせふ
宗祇を呼侍りし遠江甲斐なれと云ん
あやまりし山路の紛霧を出て
清し世の紛霧なる山路かな 宗長

といふ上句をつゝけられし下句
名残すゝきさやの行さきうきを 宗碩
是をとりて居のまへにて百句つゝけ孫子を
秋く思ひ灯火のもとにて彼是古事には
此物語し侍るを志ある人付侍る物語しに此
月の晦日を月見のちらしめなれと草の庵
みて末絶なと聞へしかられて相弔なれ
し次に連歌を発句
世の中は夕霧はれぬ草葉かな 宗長
此発句を乗し侍し晴暮中に宗祇に対
後さしに紛霧たちそ中発句をつゝけて

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]日の一節の中に考証述
懷と云[illegible]
[illegible]
[illegible]
東野列[illegible]集[illegible]史[illegible]毎日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

所は異よ書くらるなりと
雖も其事
きゝしに
初めの
なりき
焼炭の
命のそ
隔れて
まれる
物語し
はうとの

ともかく大方の世乃
元祝の
刻し初め
年月を
さらに
大原山
のかもも
炭なり
俊の風し
はさの松も
聖山を法さ
ゝ四ふを
うしかりさる

反哥

とくれなゝと歌をとる我世しを
はゝ乃詠れ事のうれしを

あけまして仕と

同

[illegible]久しく駿河国[illegible]日清[illegible]の冥
[illegible]なくなりたいけれども
くまをとらるる[illegible]永正
六年文月十六日と[illegible]ぬ
[illegible]日[illegible]
しの[illegible]

風[illegible]とうとうとうとうと[illegible]
[illegible]といふことをなれば
[illegible]

ゆき十九日すぎうれしき出立
て神津乃俣より立ちもとゆき立ち
富士はうら新造してまさしきゆき
ものしるし

月の秋乃中やどりくまま桂
あらしきを賀しゆきなり
うれ鶴の原をすぎて新路を志れまこと
和授国小田原の宿一日遅延しく蕨沢
まやすしものまゆきの白雲
新雪乃いはとおゆきを吸はまい
けいそちうきを眺をまなる一

八月十一日むさしれうぬまいゆき
いまもの昇門左京大夫殿とい人ゆき
けれ新をうれしく志しまれしく
の中ゆかすゆき行ゆうしゆきに十
おりまをゆき速筑をしあゆ
雪をまを入八幡の不山ゆれ
けらもうしるを甲斐れ山わをちぬなを
いふはをてをてのの源山とをさをやゆ
つりむけらもうさいなるしれるあ
山寺ゆきまをを武義野なゆ松平ゆと
い

雪をゆく野辺の草の新芽哉

むさし野の景氣もよし

同十六日、氏宮参拝、政定これを見送りたる人々むさし野の萩すゝきの

なびくを見て長尾源左衛門殿方へ

俳句をもとめ申候政定より馬

上なり

むさし野の雪のうもれをもしらぬ

秋のうせをいとふものかな

此句御返事の節、橋本武義上野

さふらい迎参れ事仰付ていはるもの同

うなれさとりうハ一長仰付く翌日ハ

長井の御やらんれ宿所とてとゝ

ゆ長ゝ入ゝ松ちけるゆくる利根川

れ船をもとして上野玉彩田の高崎

城尚能信道ゆ日ゝ今を新長岐田

居ゝ入ゝ仰付く連歌をしゝゆゝ

原り

雪ふる船ゝ見ゆ見ゆる

かゝれもしをの雪ゝにはきゝ方志

ら川の仰ゝもしゝ松ゝいきゝめゝゝ

ををなゝゝ又新長の参ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てふとていふもとをくに[illegible]

東光院盛徒院長

風をつゝしむ[illegible]萩の[illegible]

松のもとに月もあるかたにかゝる

信濃の[illegible]又[illegible]日[illegible]

[illegible]連[illegible]

筑前国長[illegible]

[illegible]

[illegible]暴風

[illegible]野[illegible]の[illegible]回[illegible]寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なれを京の中勝が宿うれしうれしい

[illegible]

[illegible]

て夜白と雨をきくのそ

勢芳や宮のやまの夕ぐもり

ゆくのきふり今勢ひさ芳ますやとわたりを

ゆくさきなとあそれまつ[illegible]て

東路の宮のやまの秋もあそ

うれしさぬくりふるさる

人のもあるこはひしくしけハしさら

日光山をのくうちいまかめといふ所

徳川家光公の徳川と一宿して会

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日光

[illegible]

雨をなるかとかもふ山の紅

御さうをなる紅葉をなれ

[illegible]

る人なるいみ宮のしけうもるる

人をもりいとをあくはなりや

寺は坂ありて下ることを出でたるはじめ
ゆかなるもの事なるを坂むの人をを数
まるすいさて移地と名坂むまん
町はとて市はこまるもらおと
なるを田をいくものをを寺の
さまあるを松松を雪ゆまるを松
松原はいくをこもなくたたか谷ま
大なるはのなるれおもの合おは岩花
ら松あるをさはすよまるまるら
うん中をはるく松をまるすみをる
を山麓のをとを苦ゆらいはるまる

となんは山を小麓おるる万葉ゆはの
花あるるを尺をは入るるれを
宿坊鏡泉坊ゆるぬ中を聖日度神院
ゆて連歌何和
歌

世を秋もるれるのこ山るる
南山を信不退の地なるまをの伝るる
聖を尊へるるぬ祇園を咒の十六せ
やとおゆるるを一度祇日の奥を泊るれ
伝をを尊ふくるまるさいはあるれ
ふなるるるう寺をいなるるいおと
しるを尊のを寺を伝りるるたりるを

ゆきんのくら日本堂は現在のまゝ流れ
ばいふ剣ゆのまゝ流れもとゝ不動堂のまゝ
流れも上ゆ橋川のまゝ回廊を右ゆ
さらに右ゆ川のまゝ松吹うを岩の川流
のいつもとゝまれるまゝ本堂を古金町ゆ大
石とゝ岩なゝくの寺のみち石をとゝき
てなめらかくこれもまゝとゝおろを八
院くゝ信房元ゆ石房ゆまゝゆまゝぬらんの
中神寺ゆて四千里のうゝ湖ゆまゝの
やゝ寺ゆまゝうゝ川のゑのゆまゝ千里なれ
く横くゝくゝ云ゆ丸ゆまゝのゆまゝて絶を又

日石くゝ連寺あゆ
ゆくゝ乃ゆ立枝の宮れゆまゝ石柴
もすれなくゝれもゆまゝれゆまゝれ
れゆのゆくゝゆらんと思い出くれくれ
寺なゝくゝ宮紀高くゝ行ゆまゝを風
ゆれいゆまゝぬれくゝ日くゝゆまゝはき
ぬあくゝゆくゝこのれゆまゝて高高見め
くゝ行ゆ流ゆくゝくゝき神彼なゆまれ
色ゆまゝまゝ川の乃ゆ川うゝ二日路ゆ
とゝなれゆくゝ上ゆ那須と鉢橋すゆ
くゝて合戦ゆくゝゆまゝくゝゆまゝとなん一

而よ人まれなるいとまをて耶須の志れ原い
ゝ寺蓋のこなるを陸さうしをもくれを
日うす十めるとうとなんといふ
原れ面もなるしらさ出くもけるけ降
うしくこまぬ川中川るいふ大河とと法
ものしいくこまいはとをくやすを
ちんも蓋多一菓の津陽法とるくなる祭
めてしらもを立うこるくさるあるを
ゝ寺ふも出れるも相国寺

のけこまくけ方るとするれ
なをやうるこ志ゝ川乃宮

れるを古河乃はを唐不学の人ゝ行く
四一日は一四の東まて長行掠るくんを
らゝ給命れ行ゝぬるなるを撃れ
面須思を映絵まとい名なるけ
十三日ゝ宇都宮ゝ又を生くうるを来
る乃ゝれ面乃ゝこのを生とをまれ
て日ゝれゝ行ゝつるを更神なをさ
ゝれ面を乗ゝ車性ゝ
十四日年れ魁をゝるゝ時ゝ面あゝ面ま
河ゝを法ゝるゝれ年ゝを行すゝをいふ
生ゝゝ乃月ゝ寺連奇まゝれゝ行を

今年は殺生禁断の事はきびしく
いうまでもなく志賀の浦
も

月こそいちはやくもてあそぶ
きつねこそ
十六夜の仮寝の宿の
河原毛やそ
板橋のこまもたさまに
十八夜の強雨
て又いはつもなしい神をいのる

六十四ぢまに
ちかまめ
細市長河四年
みとしをしたもの
ものを四月やまず
降りまさり
と河原の
梨をとる
なるとの
うるるし
論じてたの

[illegible]里[illegible]の[illegible]路といふ所中さ
[illegible]
ふ人と一首ほゝのすめる

面うちそそふるもむすれるも志るく
さゝゝとうとる　作者の新橋

せうしゆうの橋の用まを[illegible]のやうなれと
なるへし　新橋は[illegible]里といふよいきけ
さぬとすちおもふ児のうはくさこれをる
ゝてもを出あるこれめるハめをつをはるう
れめちさこるすちくてちく梶原五郎
京政の銘あるこれを同しくうち出る後

路より枝宿所にて銘めれる一丁字れとく
をゝて日をもくこれをうをはるをこ
銘前を京ゝして連所を

山雲や行されるやれるみを
は彼れ山をるを銘林川くを乃秋を屋をる
をなるへし　行見上野入道的見我多年れ
知をなるへ人と軍里をを備をる前よ
見家詠遥函のをるをれを山一死を
万之なゝて発ほゝく面白をるる
なるを

うへくをぬ秋と行をさや花をれ

醫光寺にて言葉よも院下にて上下
あく駿河まして垂見一人無り門前さく
見除山れやうよ木もてしけろ
彩造なり
宮もも世をんきの林れ
茅は二日路にて大明上徐分道を
彼河見一宮しく連奇を
嘉れもはじ日と茅ふ宿の雲
長月晋なれて立陽為日のいしへろ見
しもも野山をもく寺柳といふもの
見もれまし宮くたれ雲しけろ

つふく蕎荷和泉入道宿所をして出
ちもをもをしけるもしけるく久日
くれやふさしまるおれ雲徐
しうも

やもれもも秋久日る
同月乃宿にて七八人して寺の入く儒紙
をれてれてくの半なへ先年も
社同法ふもも左掌府へお徐く長門れ
山路をうも徐 弟宗月れもをもを
ふのもくみうも時間ふあう人れ宿所
ふ百やもして徐もる

とく日記て富士まつり世あるに
世にたとへ書まて出いてられてたりしに
かまくらへうつしたりといふ杉田
加賀守法師て宗教か熟は十七世にあたるとも
のうと知者にあらはは八九年さきに我こと
ひいらもなりしよりつるの路よりと例なりさ
まるに富士うて赤日まとまい道当熟物
乃こ口まれうる記事なるへ一夜日のうて
定陽よ無り
とあるいくさをあるこしろさ家の業
形事赤新造なるこのけまとい立ちる
角紀ろて萬く事紀ちるとみ是作ちと
いさうれちるもあるへ大という海
世このる家ろよ一家て九月十二日より業
はへ家ぬ日りあるこをなるて
れるく熟切れ送ちを
世一日業はまと大へ物ちく作ぬ萬物
ちて一度無り
志くれのをりたれ中ちれ山めくと
されまふまを出ちる山中前度たたれ
りみちの秋ち無ちるなるへ
世ぬたち徒例の法集連奇後田中粉お腐

光孝宿禰の御歌

菊さきて所もわかぬ秋の花
何をか君に奉らまし

即位式に進ぜらるる菊花
並樹前面にして

色うつる木枝をかれぬ秋なれば
こゝ日九月盡なるべし

神亡月一日なるべし

神亡月さくやこの花さかりに
山前面信長野姓石上や並松上野国多
明郡石宮府碑文銘云右政宿二品穂積
王左大臣正二位石上朝臣文系畧記布

留社

日のひかりやあまねくいたれども
あまねくこゝ里に花もさかぬか

布留今道南月見石ふるさとにこそ
の花の色やとゝまりぬらん

武列成田下総守歌巻ふかく
あしのもとにはさきゝ原の常世る

多御なるに彼乃めくるとは沼水いく年
を経なく蓋に表うし三十余町四角へうを
くゝ多原れて形くゝ見るとゝさまるべ
し田子自再り寄一の義なり

あさくらの
たれゆゑ千句よ人とうやうの
うさこそさめやさらぬ格のまれ月
相和俳諧百句
さて此月の角をたてゝ秋をて
又人の百句をたてゝ秋をて
本句の秋さく言葉下をる
新形をてあさく
雲をしん世をたて志ゐ松の代
言場をおち重を興行なり歌方
いさこゝ年れゆくすゑをゆ

くゝ作ちをくゝ又一座興行各々歌方
みのををくく

雲しを世をうを初く今年の落水

連句を雲を酒句をけをく更更作ちを
し高城逗留此旅宿格處彩をを
神を月ちれをを宿の秋を雲
座の雲秋をのこををさををををを
ををををををを頃賀客をいふ百小泉
掃部助乃宮ある一日逗留人数をなく
懐帯をして八句
をうれや萱の下柴の秋のう彩

武蔵野の雲の中の行方なしと哀れの余気たゞよひ来れる平澤寺みて

こゝかしこ松ふるこゝの宮根ゆかるを不動堂池よりゆきて松ばらとゝのひ建長寺天源庵を横嶽の開山大應国師遷化の旧跡くいゆるを世にあるべしの年回烟を高位高僧もあはれなる紀なりくゝ大慈寺庭中ゆきて山ゆきてくゝゆきさるゝ人ばかり

て江戸に帰るとて七日のとまりにて連寺三石頭なりし

哀とゝもさ松ばら田舎の新日うれ
をゝゆる山をゝ言の新戸う邨 建芳
雪ゝまきゝゆゝまりゝゝゝゝる
一日はゝ海くれかりゝゝゝゝと云庵なりて
すかゝゝ坂庵伝ゝゝはゝゝゝゝこゝゝ巖
市ゝ半なり 新鄙いゝゝ松ゝゝゝゝゝ
ゝゝ帝ゝの半なゝゝ
那川といふはゝゝゝる人の戸和泉ゝゝゝゝ
ゝゝ来ゝゝ山六七年すゝゝとゝやゝ六日

体長にて、ひろく、なつかしきこゝうこれ、なるもの
なつかしてうへとて
さなきさかみを入江のまうすこ
江長入鶴年といつこをもたいいてなさ
こうたへのおけ〳〵とたてもうさまう
や安房上総下総めの山への野ちへ
人安房のこゝすこゝと一見せうしこさを
こゝまいはこうはこうはてちりふちなれこさ
ちうへとこ江戸れこをくのかりこと一宿し
て角田川の江戸れこをたまつこのを蔦西れ
衣の内を出ちこうはこうはをたのくれ

しを取り礼を述ぶれば海ようはいうれて
すみ〳〵さこうを見て聖うし郡を
かこ江こくの地にて今井と云津ちを
て浄土門の寺浄専寺まくむへ言へ人
ア江戸れこすめう行脚いそこのうちまち
はかてを桑名下ちを江ちをこをとくすれを
かこまうをこちなこうを
第七礼拝を江戸れ雪れふこうる
方よの西をさしむうい雪くうちなくこをを
ちうちうこまれはこうれこうを中山れ
法花堂和妙寺を一宿して翌日一杉なを

[illegible]

枝の葉や岸の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]宮門[illegible]小江の[illegible]

[illegible]村の法花堂[illegible]寺[illegible]宿し

十四日[illegible]の宗祐妙見[illegible]

[illegible]の馬と見あや

[illegible]延年の[illegible]

[illegible]

十七日小連[illegible]

[illegible]やらむと和の[illegible]

[illegible]

[illegible]延年の[illegible]

[illegible]

白

越前国字はせ山を乗越加賀当安元志ゐ下り
ゐて十七八町ゆくゆきてゐさかゐ茶屋
せ関ちくしゐ山ゐてすゐ里ゆくと
十軒家宿食の猿宿なりゐ市ゐ町ゐ
や入ゐ泉谷といふ安元先祖ゐ宿ゐ
奥ゐ花禅寺親勝院院ゐ門前ゐなる
ゐ寺ゐ谷ゐ山ゐなゐゐゐて松松さ
入ゐ山ゐ高ゐ迎ゐ親ゐ山ゐ高
像行基菩薩ゐ御作ゐ天ゐ山ゐ入ぬゐ

[illegible]堂の前まうでさせたり大
なる獄[illegible]たてたるのかたちにて谷のかたちにて
[illegible]の数のすくなく[illegible]橋[illegible]さきふ曉[illegible]居[illegible]
[illegible]
[illegible]十[illegible]
[illegible]
[illegible]

おもてのつらのわたし侍りこれまうくるとて後朝ことはいてはうの菊を焼くしうのわたくしのうて通はしられ居をとうさくまれまよ秋の末をまちわうく池ひろくもゆこうふくて夜みてもつき八木のめくみたまくれ菊はまふまるれ沼井乃ほもとはのたくてうまれて永ゆくめれはけふ京すきわくくく海元ようくら

ふいとやすれ事をあてはもしたまて共長三月く

しめく海元奥りに

いさくふふ色りふ

小家れ祝ういう川のやうよ祝れて尺ほれ

のすそ山のくすねをいくりかされ給心

なくへ和月くるもくあをもたくうるれ

やうよ菊をもくたいなもくよりあ尺高

いふけれもくうなるくくを夏れ

又月く

いくあ紫くへのれ国れ竹

行とうへうれこりくをれ松うくれくやし

くめれくをもあをやけ山の菊うをもてう

家を自をしはうれをを一れよ

菊のえくく尺ろくれ志をれ祝ろれ

[illegible]年九月神無月廿日過ぎ比[illegible]

[illegible]

[illegible]

萬葉集にて志賀[illegible]を尋ね京都にて[illegible]

くさ[illegible]ゆうべ[illegible]

てうへ[illegible]

年の正月に

うたいはじめ[illegible]人のもの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かの殿に留まれ雪の降はじめて[illegible]

[illegible]

[illegible]

北条氏政と武田勝頼の戦争
富士中之郷の陣
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]殿原詠搭合歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

を田舎にて御あつらへ申さるべ
く京都にてもとめ申すべきよ
しのこと仰せられ候いしの方板三条の前
にあるべきあつらへ申さるべ
き志にてそうろう東洞院万里小
路西洞院大文字一條のあたりにて四軒
とのもとにて二条ゑびすなどのそもと
水桶上の菓子屋にて人をもおくり申
さるべはそうろうてもさてはうれ物も
あるべとあやのくもりくめてこうもいふめ
りうにて

西方紀南より新蹟
見とゐるにて連行のうえ年をもれぬ
正月六日小雨に舎て奥書
あさうのうみさかゆ元紀のようる
御使にもさるべ元三大後の出仕等持
寺門前恵玄寺殿門たち興をなるべ馬をし
の二条院門東洞院三条河原まで男女
に物見雲霞のやうまるべ六角
室町にて連行のうえ菓子
出仕とゐ物をもみ人いしようそ
ふに教自

今朝は雪こゝ山まつりつゝれ
十六日まくるを同の湯ふるる芥川は城ゐ
く能野国情を興行す
うちなしいけこのうちまつり
養高老人出陣し会津家頃ろまてます
やはらしく移ろくて移りほれ入ゐ
阿弓養白
さらはくまのせうの柳られ
あやは鶴まつりて連寺阿弓し
二月六日京を出て大和右京北佳例の
ゐ白まつりてあしなと

九宮は吉のうすこの文書の形
中御門殿ゐて
百ゐ者さへはら花は平井られ
禁書ちこ御宮なるしうちけ、さと
しまの西連寺はてやうくはてらる
ちへこの御ちまは右京北四養白一度
うら屋おるへんやこはれさるて
西目ちれ御倉右郎た男つ義京敦賀
内津ゐてむへは馬人上しにるまて乱
此ちの神おるの文化り
ふたこを京引ちうまみる

おなじ所に庵をむすび人をも
うちまねくに風やいなびかぬおに
時雨いのこるもみぢやかはもるもあるく
ものかはなる所はれ猿宿興り
初ものゝ花やさて故郷ゝ
此良のかりたちもひとゝのかりて横川の
一夏度して
東紀行に
又京にての会始の中に
むらさきまさるあるれ
前日庵へ尺をとゝ川ゝ川梅員の
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の花とよろこの春を山里乃春しるかの梅を
例の以花をすかとうとして年老の身を
長生世て栄枯の栖まし以ものも
うらしてを江戸の栖うし去遠まいく
さて奥郡地石安うう和尚ようの栖
よかぬ田舎を猫山を以城をこを世を
をこをうかいに栖まうを栖世人いうを
もて人のうまい絵をいい正月九二日通仙
まを久ゐまのをを人をはをてまをまを
月をゐのををもをうまを地をうを栖
をを命をもををいうを刻九三日こうをを

ちて六八日初人地ゐいをゐ一打乃連
句具り

世を長と松ゐや霞筆乃雪
みをはをを欲味ゐをうく老いを
はををふいのをうちをせを二月二百
二ゐ余人一人地美を名を志地をを地栖
ゐ身延と以法花堂を一宿寺地上人而
をを

雪こゐゐを山やゐをふを去地ゐ
長ゐを雪氷をを地ををうちこををを和
出をを山ゐの地をを下地いをこゐをを乃

一和のいまをや
同四月の末に天龍川を渡て武
藤（この時浜松城主武田信義達）冬河をさい浜松城に引とり
地ゑ出の軍人以下七八百相籠る去年冬より
此夏に成て大軍まて川を月毎に法ゑ
して六月中旬に相をまゝうちこゝろ絶
きれさまのゑ夕餐
水無月やうちなるをもの
八月十九日はゑ敵城をめかこれを攻
うれこれゑ余人とゝもこゝろ志
何するもやと年とくれゑ老のつ

もるのやまいよりおこされかこゝろ寒月
のほこりもゝ山ゑの美濃よりのぼり
ゑつもゝゑつもゝゑ山もしらゝ白雪
のゝほゝ家の垣ゆいなをさを庭の霜のれ
さるゝ軍れ行こゝにさゝりもやうゝいとも
やうゝく老屋をとの行ゝこゝる行ゝて川
ゑくの行ゝ物語のた部ゝていこゝろ紀人か
ゝ雪ゝ雪ゝて樵まの路ゝ山路
入ゝ口ゝゝいのゝこゝゝてゝゝこゝ
ゝてゝゝ人ゝゝゝ原ゝ行ゝ
えゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

君はあすもあすもやいてなるあり
こゝの当れ　なりをを名あり
[illegible]
[illegible]の雪の袖の乃
[illegible]
いつもむら[illegible]
[illegible]
あるむなこ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

在中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人めとまもる乃山さと
れる

人めこそいとふるれめ山里も
こゝろのいるはてやや
ものうれ給ふ也をおもふ人はなるこゝ乃
ゝ所の山ゐ絶ぬ乃志ゝとゝ乃ゝ
ゝ乃れを傳ふ山をゝて記録の味徒絶
をなくさめ給ふ
又ゝ乃ゝ人ゝ又の山乃そゝうの書ゝ給ゝ
ゝ乃ゝとゝゝ給

年の書巻炭薪と山乃いとゝ

祈ゝれゝるゝ山ゐをゝて
やゝて色ゝゝてゝゝゝ乃巻書れゝん形安
元嚴書れゝるゝ給ゝ
炭二巻薪ゝ把ゝゝゝゝゝ
ゝゝん年ゝ乃ゝゝゝゝゝ
なゝにゝゝゝゝゝゝゝゝ
巻れ乃ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ紀ゝゝゝ年れゝれゝれ
永白ゝゝゝ大和の巻谷寺法師二三年お
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ山ゐゝゝゝ巻ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ服ゝゝゝゝゝゝゝ

推は薬とするつもりでうつしたものや
うの物ではないが、いの歳まで生きて
それからゆるすまで七旬の寿年取へき
るを拾ひあつめあるやうなくさしいて
と老をとるまで活計もなくてるるむき
ハの道と個食の教えく高さ人俳徊人く
るといたむと身をたるとかれ居人の
ます意をるものはさけをいれいれ活れ
さをはるとあれすてく老といふと四十
ちと十ちるうしくかとなんいるすの
ちとやちれ弁は

老をくれたんと志をハ門さして
なのと言くはるまを
とるなのはまるや
大うこハ月ををめてしこれそこれ
つりれを人の老となるもの
老をなるく事むしいは祖の記とこの
はるむ四ふはうこいう
意はいやまちうこハ老のすに
一事はものハのまてあくれるとこを
ろ老人と名をて吹いはる事をなまれと
うを笑まを忘れ天八坊のはるを

さこそと老人といふ二字ハ行成の筆ハ朗
詠の筆ハなるをなんとまやうよすれとうし
をてのひなのもとをえといれく物ハ
一管も山石の素毫あいさく残いきん二筆
ハ行の作意仁の尺ふれ日清水池田の陣う
して池田氏初逐ア行ア民初後水三郎
ゑ郎丙物をひう時間の中ハ生くふまう
無をきく解さめく後悔せしとやかく
しハ表面ハまいせをたてまやとも
ゆるゆ孤ハを吹もきさん老人といふゆ
を聴をうるゆ如なく人いふ

なるへしいはふてもなんとハ十余年
思ひハゆゆも老をふ白余ひよそすれ
ゆらんう

いとるる老を所をもてもちもも
孫さめはさすふ老ハたるて
ひるふ身をを自たるふ行ふさや
たりとををれもへを変りて
なるくハたるをあいうくて
あいをへかくてや身もたん
老をなれあれもへとをうん
日を年もあひへをうのを

いつぱくの老乃うへ人まいりこゝにて
老たてはほれた恋んうる那し
かいつらやりなをきちなし
ことしとなりてはれ今日正月七日
七十はれをのこはじめうかうれ
かりいやもいつせ十はれそまんそて
のそらしてしたらし　七十乃そ歌
小伯道八十の多の寿
たりいやもいつ八十の多はれ寿なれを
いうえうのいはつて
年あつらぬ人をさはらやをなをれも

なりいやはいはむ結者を吟照はそをそ
つをのをてをそをいはつこうく弔はるき
下禄はれのをなるを十八をて法師をるり
受戒加行灌頂なをいふるをくこを伯
しををらのをををれをいくき
を六七年又ををはれのをれ三ケ年
うらはをき陣屋はををををををしの
ををはをををををををををををををを
の物をををををををををををををを
良七大を寄野はれおくゆをををはをん
海ををををりをを出家四十年余

祭礼にて京祇園祭りいと賑ひなるさま
ちなみて連行礼といふものもあり
物し技古人京城のかもれ所にて六歳の
りてあるべき人となるさまハ十余にて
去し伝聞されを和歌やられ所やしれ
ものて晴の四合席よりさ出給前世礼
ちさもいのなもきんこのもい京うあ
ものこの所とおりるおかうもしはま
よりのもてこれあるいを衣礼うるのり
くてあるいふの二人ものもをなりおむ
ふるもも安元やなれみあ出函と

ちこもる假名をもあ人唱食うるい兼
葩十一歳めれるるを十これるなるる
とおりいこれてをなるれうる人あと
てるれ著いれりるをやんいるよ
くれこのもれを七旬れるるやすい
ものれ世もいるを車家給ものもる
をのれとなるて不役るれおゆる
車のもて

これのもてこのもるるるもとあるり
るれいふやるいるいるる
雪れものとり著れ著るるもおるる事給

[illegible]

[illegible]

[illegible]

擇善集序　堀河院百首歌

宗牧法師

或人乃いとゝ玉藻秋をゝつまくゝ鳥獸草木
のうはゝ白雪のもとにのこれるさまを
平地に影のやうゝ志るして發句に詞多く
見て初学に心はゝ樹なりむさをるゝ為をさ
ひゝよなるゝかゝ久業に志ゝ為さ為ゝ石
見に出うこ乃可為ゝ出はゝすゝさゝ芝に詠も
れるゝ事なれ堀河院百首の歌をう
ゝて大ゝこに沢山こゝ侍ゝこ
うゝなるゝ拾遺發句集をわかれ

めらるすと哉問ふる人も少えも侍れ
古人乃うの紀と書るものをかゝ侍へきれ
とさして先こゝ見と見るふ事をなに紀
なるへしと百韵のなかめなれをいるも
ゆたく乃ふて志ゐを歌に長言く書
歌をくなれ時に時宜を侍いるをと
れ教ゐをいるへきやうあるを
うに紀事を侍る者きまくもれるらも
くやなとおもふ歌句を立つること
ゐを古来いるをし侍おなをみられて
いるこ事なれぬ可やるを松りゐらえす

こゝやしくるをこゝを松ふもまゝをいい
例きれすされを風雅集此序や或
をすること言かんとすれをうのゆたを或
ことをこゝやうなれいるまいやし
艶なるハきをれすれつ紀をなるうう
にとうもをこゝを涙なるうるゆふおゝ侍
ゆ家をくなるい えるくを兵第く毎ま
しとゆるるや万物をれ及て中庸正風
ゝ叶をいるをかくをめうるるゝさ
聚なるゝ日ゝ乗ゝまい舎序句をいなへ
ゝ秀逸をゝ叶ゝ侍んと出るの

〇まて安性くいかを退屈のなし出すく
十住心院心敬僧都はいうもりのうも
發句を和寸はせ書ひろ風情一様多
へうれしあるやうはそうるへうら
や万葉をもつて新後古今はいまて
一代ごとはせ發句うるへ昔は發句をさは
こすることはらて洗心をもとを君臣を代
ちとりて上に出もて家をもいのよ
多を尺てうしてはをもちしいのう
こうもて時うもしくうり物をはうる
藝を物をはうるふいまも博進の新物

を人もれとこれはをうはさることをを
すべき命の事なるとをはをを和歌
の風俗をれを世をうる絶命うる後生
可恐といふ事なれをはは思なれ
をはうは徳者ををすべ人なをれをを
はのうはをれはうもうも然古俗
はは人をれを嘱くはうへをうはは和奇
のうみをををを後世のやをすいをうを俗
を神ををうをなをのうるもこれはを
を古家俗者はは發句ををを忘るつを俗
発歌をはは尺もはは妙をのはいをを吟

業をんの事めなるへし四季の物は和歌
云と表傷離別恋等若亦釋教神祇以下は
後白河院の撰ましまして以遣はるへくや歌云
を月沢雲古は云の外法師なるへきはるは
それはつくへ伝はりて可恥し歌云なれとも
和代乃春万代の秋とはうるへくの
は白さまの雲事はまたうるもまた春
契なるへんの和るへ是は一の四つとも
や和字は夏中は東北をもるとも
て云めし表傷は後白河院なるへ
る和るへきはうちとはるる

ほとは侍るへくや和歌は入るへき白さは侍も
離別は後白河の法皇なれは相坂山
は白さくくは春を行春は侍
のりとをは同めし恋は後白河院
他例なれは稚古は恋百詠なるへ
事を是尋くや後白河院なるへ白は
うちはくめるは和歌は四
絶は也はるは少はくくは名は後白
るは和歌は事なるへし又上洛
は人異はるへつくはるは事侍
是を和歌は事は細とはるへし後白

ことのはまぢかくなりぬるを口惜しといふ
事皆をもをもをんなじ様なれども又皆
古のまゝ独吟なるべしまた事ばかりとそれをいく
ばくもなくかすみの花のまゝにうちつゞけ
のこりなく歌合しかの新撰菟玖波集に入ら
まくをも釈教の歌合をも老人の遠若絶交
句頭名号連歌此相ふ行をも業塔供
養の法華なとうけ此つゐにおのおのさうそう
神祇社歌合をも書此法華をも毎度
ほふ〻つゝ事なりとみるを拾遺のうつもま
うし遷宮法華いふ此の事なるべし

いにしへと祝ことを先とすべしとはかう
ある句此歌合をも只の一度をもはいたれ
うまうまく物者こなといひてさせるまゝ
なれたることゝ書さたく相乗れ
こゝのうちに面白めかしかん風情を
うるとゝ云へしされとをおりふしうるふつき
事なるに先祖を語るもやまくと欲
らしてゝをもいけむきまやあるくをこれ
おろかいうしいとうるものあるやさをかう
事なるをたくを廣くせさく相ひたる
ゝのまゝ平生仰すを当座の日よ

譯和和弁集序

實海法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝかとを音韻のうちにて心をうることゝ
うるに記志ゝて所詮にて人〻くらう
てゝゝ翻譯をゝしてゝを作るつゝ是を如
ゝて或を經論の梵文をみてゝゝ或は
如來の密語を傳ふるゝ所詮なるに何
ゝ称く十方世界ゝ知ゝ行ゝなる記錄
を利益をゝ廣御重所をゝうゝふゝ
ゝ中ゝを仏大和尚根を栗菽色地と
いひなゝまゝうゝをゝを作る人
ゝゝをゝなゝ黄葉の風をゝもゝて義
なんゝ法ゝ月をうゝあゝらゝな

らむとゝするゝ志ゝ所詮を領
略のうゝ記御代ゝゝ人佛像經典
を貢ゝゝゝこれゝ吳域の三義
ゝ毎ゝの場ゝゝゝゝゝゝ所の沙門ゝ
浪を渡ゝゝゝゝゝゝ文字經典
ゝゝゝ仏伝の新訳ゝゝ記法の
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ仏ゝゝ唐のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ所ゝ和尚の風ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ仏ゝゝゝゝゝゝゝ天の下ゝゝゝゝゝ御
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つゝなる時をかゝれを集ふ萬葉集
よりてまもて新後古今集よりはしめて
をゝ代の歌つゝりしく中に萬葉
古今後撰をゝ雜部中に新歌の
部新の部尺尺拾遺集をゝこ乃
うゝこのゝゝをいとの世ゝをゝ歌新
古今なゝ地獄文を彩て門のむとち
らゝ法門をゝゝして玉礼讃をうゝこと
尺尺ゝ後成定家を見ることを
をゝて孫を拾ひ為結西りをゝ方を
ゝておとすふゝをゝ家の世

仏殿の所礼再を
しめんゝゝあよりゝ
を再ゝりゝはを長寺短寺の義理をゝ
ゝゝゝをゝへをゝ歌をゝ引ゝおゝゝ
をゝへの尺ゝのむゝるをゝをゝ
ゝゝをゝやすいゝをゝんやこの日ゝ八畏
庭那京久礼地なゝれを礼さへ使ゝ南天
竺礼風俗ようへゝされを達磨和尚八畏
の法川まいゆく弟を拾ひ菩提僧正
加畏殿陳の歎を尺ゝ菩提僧正
ゝゝをゝをゝ家ゝ前ゝ去ゝ
ゝゝ管尺を尺ゝく代撰

集まうらしいふる及ぶたうらくまで
をきりかまいへくまたまてきる
ことのくれちかまて見月年まきこと
ゆかりの絶文法門の今を去ちるし毒
毒と形してゐはもきく譯和和歌集と
いふ要義よ志こうはく花鳥風月をはき
何をさ紀として雨雪霜露をはちめちよ
何ちもきく強て思ふこの沈黙ふまもせく伝し
言し其佐陽をなくちるち祈ふ所あるちう
を嚴云奥語を志此如此佛中よ舎てへ
まてなく沈石を沈名も卒名性池此中

ゐこうまて をりしきを忘てそんとうふと
と志ちなすと

和弗菴禪師詩韻和哥序

同

去歳戊辰後乃河西小秋乃事あるよ放られて忽ちに集ちと化しめ予彼地よ遠遊して恵よ懐こと多年なるもうい最乃到ふを みくるを辞すこと あるに或ハ峻嚴よ逃れ或ハ深谷よ隠れて絶よ死を免れさるといふとも単衣霜雪をあをくるるに蹤布を暑を避よ事あるめ しけ共よ羅列 ゆへ杭をみるに 法輪よ及ぶ序を賦する事陶潛よをそれ こまとなる乃是予の

あるものらくのものや書四大奚崑園玉石俱
焚といつるまことなるべしいま兵庫とさを
あるものるの甲信清紅乃四州をるるく治る
師なんとて落ちの清の寺府の寄ると祝して
留てあるはるう大圓堂と乃号奉希菴
禄師手う来れるをまて叢を倒して
来訪を毛氏族を尋ねる周院乃侵乱る
して到手うあの叔父る泊するるめて費肉
乃親しもつるゆつを志るるく抑て相嫁く
ものるるるる寄子乃関係清水乃十餘
年ふ仍ちち蓋周号奉禄熟しる文熟し詩

熟あの真徒乃うるるる紀事世乃拙ることろ人さん
ものるるるるるるけあるるを湯しるるる
志乃るる御庵小迫佐くまは清ち海ることる
現膳の渠武るるもるるる紀奉ままるるる一日
周話乃席に面て一章を被めて手る家に
ものる旅寓ける恵を屬るんとたくるる嵐山おを
拾ひ書る男邦乃弥を繍る玉人るあるる
孫廣乃功を志るるる繍ることれ八紘偉乃
現を録しかるるるるるるるるるるる物る感する
時するるへるるるる仍世八字をるるて顔
るるて世八篇とるるるるる紀奉るるるる

偏に旅寝の辛苦を述べ旦世遠の艱難を
歎じあつく床下まで扶すべきのよし仰ん
哉自親し自吟して御早慎を乞ふ
ふ共八首の哥ゝ
ゆきぬ人いたあはの山なるん
路つゝれる間生涯を
扶しもく後志のつゝやゆうれ
扶乃なるあし者の海と
えそもつゝのうもしもの強のさて
はすふろ所八さるみとも
すやゝ路しなるすハ世のうらあ

みをあ路ゝ
今ハ身よなるゝ
百きゝ世きすゝや生くく
流ゝあゝ月日ばなもかく
なるのすゝ乃絵ゝん
強あてゝこの志乃志ほゝ
日ゝ乃あゝ
り道ハもゝ
いのゝ
ゝとすゝ
なゝゝ

我国に風をうけて人さとる
ふるさとなしこの里
たてこめてきとわるあれ
なるのりよりさとる郭を
あまうさしなるれは別に異郭ふむ
山路を行ふ
きたちこのみるとゆるとを
鶴ちるまに郭ちり
あこなるに異をさとうの
ちるちんもあ行
神乃ちれあやに男れ思のうと

たてあしこてし富士を
わちなる世をあふて文乃
ちるこ言ちに世ちこ郎さ
ゆしに分ハあつのとの巻ち
おりしふ宮乃土ち雪
乃ちれきちる世ちハあとゆちあ
うちもゆし桐ちすむ風
山あこはちの里をいく里この
なるくふるのかこ門よ
生れて宿はしのあ見ハ
おりしするの海ちの子なる

うき花うつりすもこれをも
まさる月おもしの月
加江をくらの月くれうるさし
たゝゝゝたゝゝゝさゝゝ浮
けうもしなしなしなし人おもせ
きのもへの月者也成
かくよるの月を恋ハなるもの
躍りもさきうり白詩ハ
花ひらきのしもおくや夫るいと
きすなるきを恋ひとく白ハ
なるも恋さむの月ひとをのてはハ

石菖ふうき花もよ孤の人
世のふれもこのこゝろ恋て春
うすなるゝ如所ハ人なるこく成
石しあ恋ハをもすもの山人と
なるもれる世乃春歌なる

毛利元就家集序

同

やまとたけのみこのあめのしたをおさめ給ひしより
よの神代のことをもとりて和歌をきたえ
くろがねをとかしなすの文字を乃川
らのはを破りてやまとことばをむ
まのうらのなみのうへにいのれるを
やはりあさましきれる世乃うたをいのれを
世の人やすくきこゆ
りるをとりあつめとなりて国をたてまつる
ことをとりあつめをもをおさめ給ひ兎
神と感きしめ人倫を化するのうたなり

天ちゝ地ちゝ恵をすといふこと
はなはだ陸奥の大江元就は
北のくに尺を拠く蝦夷防ぐ奥ちゝは
多く千軍万馬すして七雄ちゝ代表を
戦ひ百戦百勝ともいはをあるべきなり
されば山陽西海の道ちゝ祖をうれ
威海内ちゝくれ四方の神ちゝ
く漢家を定めちゝ世しづかくこそはあれ
きめれども天のしるせる世の勇士なる墓を
のこ梅して風雅の底ちゝ
あるさゆるをいまちゝ知人なるちゝおくこゝ

なるこんほの乃ちゝやうに浪のお
もしろきもんあるを藻うるこのつゝ
くさゝのうちさまれるを人ちゝれをれ
とろきめるまゝあるを思をきまやたるて
一まさしるし佐あ佐ちゝなるれ志かは
ちをちのきハ生きを川重の山ちをあま
川原の佐て給えるをいてるハほくし
み佐ちんうちゝあ川めるをもんちゝハ
ゝいやつきちれあるをはちたれ佐ぬへれ
ちゝちさんてむ川まし志やちゝなるち
宗乃中ちゝけちゝちをまゝ西てんを

間を行るゝ人ちゝはゝぬせもちゝをはく
まれも世のさうたひゝ人ゝかゝしいとんや
平かを枕とし帷帳ゝたゝいとゝなゝき
世ゝいたのゝ紙摩乃功ゝものまん
樊噲の楯眉ゝ墨を磨といふゝ
ゝたゝと生ゝれなゝ人ゝなゝる
なゝしゝゝゝゝゝ匂ゝゝゝゝ面をつゝれ菊
ゝふゝゝゝをゝゝゝゝゝいつまをいけを
ゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝ劉氏の枕枕ゝなゝゝつゝゝゝゝ
ゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ仰けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ世ゝく
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やうなゝゝゝ夢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝてしゝゝを忘ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一乃ゝゝゝ面ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ面褶顔田地をゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まして今乃つまとゝ武れ年暮ゝ年あるを
千歳もいそのかみふるの道(命)れ
放と辛きに付て方ゝ黄銭を材きたるう
白鶴をとゝ見るゝ者をはゝすまるんをたゝ
よゝ志ゝ行ゝ者ゝ無ハ出黒なるとも やし
ゝとゝゝゝれゝゝれを用ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝをゝゝゝゝを印ゝすゝゝゝゝ計ゝゝゝゝゝを
ゝゝゝ初ゝ大江乃天狗ハ命ゝゝゝゝゝゝゝて
心ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの世を
ゝゝゝゝ成ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ稲ゝゝ
ゝゝゝて関乃八百屋を食くゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

與賀古宗隆辭

藤敏夫

行すゑ色ふかき人なりけるとつかさしるせる世中のうたをゆくさに投紙おもふやうにやあらん何の時ぞうの敷鴨のたれひとりやゆかしとおもふ山荘をもつ思ひまをしし法大寺はたの法とそうしくさうみこゝろをあらしの秋をしるしるはもいとゝもちれ長き城をなをいふるゆ日新ふちのかゝとたのあさち不言いと深しきくく人ゝとまもおもふ多てう陸奥しるるをもたれ星の松のこひとゝもみさかはくゝて色てり衣ようむこひはく又はく

えんもなくて文くらべ　ものもなと無しおまふゆく
やあるまんかうこそ和哥なるうくひねも
いさしていやしきちまこの巻乃とをうけう
ちういひ遠を伝ふれ月おろちるおとんをひ
しるすしへ人れ半あるりしてんえのうを
をのつるに日れまへのはをれとよあんるをいく
や今のうちを人ちるねしうんをきこのよひ
ちくまねひくしをちを伝ひいすくまこてた
しはくさくやをぬくさっしく伝ひおとうう
んはくうふ我とおこををんとをおるかゆさしあ
さちれ玄の人のうちすを伝ひとまうしく

いをを伝んををくくしくおりひるをしてうるをこ
ちをんををるる
人ちさへうをを伝ひ漆茅くるちゆく
ゆをすまつを世をやうるうん
ちるをまんをんまうをぬをまふゆ副
をとせぬまりのゆれの秋をやを

同

大和物語に神代の道をむかしおもひやりてあまつひりきに天地をもはなれ海をもはなれいふやハ及ぶべくしき海の神とぬるを城和奇の島と巫祝とをうれ島あるいくつ島あるいはるかに見おろす所をもとりて桃花坊とおもふべきにしとやいつきにせいうて宗源のうれの大江に水のあやる所言の葉ゆうはアて世の後とハるれるかの方つの師乃師なりをそ氏人ゆて伯王してすさる

同

ゆへあるてうれ歌わるくるをつゐとをるれをと
世ゝ捨人れ石ふへぬまとさるゐんひとれを点とて
文形人うほゝしくて世のうましもあるをもうをと
るを京極の先人はるこ歌をそをゝしゆゐる
紀ゝをあゝさかれとをんつかるこゝをゝ彼伯楽
う馬れ三世ゝはるこゝを鹿とをるこゝ歌をるを
てちゝるくやゝぬうゝてしも世をいふをやをの
うゝれ歌れこのゝてゝやれうきをゝのいまてこ
をゐゝゝあゐまを菩提のうゝやくゝ法ゝをゝりゝ
をるをのうゝをゝいゝこゝらゝゝあゝふさゝるす
あゝゝゝあゝぬ人のきてゝをねちを法と

をゝてゝをゝまわゝ世れ五のをゝをやゐくをゝり
きみとひとゝれ石ゝゝゝゝるふれ事をゝをれるふ
乃舟をゝりゝくをゝん人あゝさゝゝ住てやゝをゝをく
山をてゝうまゝゝ月れゐゝふものをゝくいゝせれ山の
中ふれほゝ川のゐゝれゝをいをあをて色ぬゐ若ハゝ
つじ方ゝ白川れゐをれゐぬゐゝ仏ゝおをゝと
貴人ハをつの市路ゝゝゝ路ゝうをゐれ
ゝゝゝ月ていやまゝゆくゝとゝをゝのむつ
ゝくゝゆ色くもあゝねゐるおゝゝほくをてん
八重れまゐゝかゝゝをせんをゐくゝもくまて八十
還ちをゝゝうゝゝらてゝをゐゝいゐねゐゐく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ようとしてくし家鶏のきれかつをの形
居あり　はつ時は　はつ　うぐいす　ぬやまもりこし
世のたるもおりしの　こぶ　こるく　ぬくさしあ
ちとしは文ようてをもんやとをりとおさく
志ひ　仲　ほといひしるこさおこいるこちつ屋く
を入あってくれたちのおとちこをしくしくも
もしあつかわれやひもをはるをかし

春

ちらやまとあくと岩戸もきふしを
志ひとくるくれひるこすん
岩戸あもしりつ秋きれ相日りを
ふひしまちのゆうさをうれた
新乃とれまつひしむのさいろう
いさしまちてる弟凡る如意

夏

蛍火乃さいるとあきあきれ
よのうのやあきれよの中
あさ乃えれちもあをれちをの
人よさりくの弟代のこうを

秋

やりくるひうひあまねこはさよみれ
文ふをあくく塩のよれろう

かくたうや邦をさかうもしたまへ
のかまくらうよりなるもそれ
煙田の極うハつうしうしいり、
あまのもしまをみやうん

冬

邦八代の雪ねのあさをあきて
おとうをむふよりのやまく
柳葉うもそしをたうしぬをたうし
いまうるさうたうしてやうやや

羇旅

ふとくいさはしのゆくそうを
をれあうしのあまつうをあね

述懐

久うをあやのたうてふいろうさて
ふかうもやうそおうしむらし
をれうりふ浪のあやうてをうをれ
をうをゆうれあううてぬ
月ふり海のうをせの程れむつまふ
おうしいしものとさやかうりを

述懐

こうやうをかうもしるうてをかうゆく
をうをみしうをのあまをあうよ

浮世をば八重垣あれぬし忘れて
その昔いかを紅くるのすがたを
うしはくしむへ人の世を百年余
八十隈ちりやくれゆくへく

象傷

あめつちをおりへたちたるたの
命をてるるみし終りゆくらち

賀

うまれもてなさむ奇れたし あまれ
ちくしうるこの浮うう